

第四章 西南の役

一、秋月の亂と萩の亂

秋月の亂 明治五六年の交は、維新の鴻業ほゞ成ると、政治上の勢力に一大消長を生じた時、志を中央に失ひ、滿々たる新氣を懐いて野に伏せるものにして、所在に割據して兵を聚ぐるものが少くなかつた。

明治九年十月秋月の亂起るや、廢隊の一部は出動を命ぜられ、第一大隊第二中隊は同月二十九日屯營出發、暴徒を索めて豊津に到り、一戰の下にこれを撃破し、後數十日を経て亂全く平らぐや、同中隊は舞事小倉に凱旋した。

萩の亂 秋月の亂平らぐや同年十一月、またく山口縣下に萩の亂が起つたので、廢隊は命により同月二日、第二大隊第二中隊の一小隊を、警備のため馬關に派遣したが、これ亦旬日にして亂平らぎともに大軍を動かすに至らずして鎮壓せられ、従つてその影響も極めて微小にすぎなかつた。

二、西南の役起る

一八

西郷隆盛報す しかるにその翌明治十年二月、さきの近衛都督非役陸軍大将西郷隆盛、薩南に據つて兵を擧ぐ。これが謂はゆる西南の役で、この戦争は全國の鎮黨を悉く動かし、當時用ゐるべき最大限の兵力をもつて戦つた大戦争であつた。

事は決して西郷の志ではなかつたやうであるが、桐野以下の私學校生徒に據せられて、つひに起たざるを得なくなり、「政府に詰問の隙あり」と稱し、樟樹決死の薩摩軍人二萬五千を率ゐ、縣令大山綱良の後援に依り、二月十七日鹿兒島を進發して北進の途に上り、行くく先づ熊本城を包圍した。征討の詔下る 當時 明治天皇陛下には、京都の行在所に御駐蹕中であつたが、大いに時局を御診念あらせられ、二月十九日征討の詔を發せられ、右栖川宮熾仁親王殿下を、征討總督に任せられた。

三、植木の初戦

第一大隊左半大隊の出征 これより先き聯隊は、鎮守司令官谷少將から、長崎地方警備のため一

0622

個中隊の派遣を命ぜられ、第二大隊第一中隊(長は北)は二月十一日屯營出發、馬關から海路長崎に向ひ同地方の警備に任じた(三月下旬高瀬出張の命を受け二十五日乗船岡山に上陸し二十七日高瀬を経て七木に至り虜隊に合した)

ついで十三日鎮臺司令官から

『勝山驛隊は熊本に集合すべし』といふ命令に接し、翌十四日午前六時第一大隊の左半大隊(第三中隊)は、山崎大尉指揮の下に小介を發し、驛隊長乃木少佐(希)は同日午後六時熊本城に達して、翌日の團隊長會議に列し、且つ親しく司令官の訓令をうけて、再び熊本を發して歸營の途中、十七日正午ごろ久留米において、折から行軍南下中の第二大隊左半大隊に會した。そこで驛隊長はこれに『明日府中に轉宿し、一小隊をもつて久留米附近を警戒(音時人心動搖して向)し、且つ久留米府中附近の地圖を作製せよ』といふ命令を下し、行程を急いで午後十一時福岡に達した。

しかるに久留米に宿營した同大隊は、同夜熊本城の谷司令官から

『賊兵早くも水俣に達す。その隊は急行軍をもつて二十日午前中に熊本に到着するよう努力すべし』との訓令に接したので、翌十八日早朝輕裝して久留米を發し、前途を急ぎつゝ、ある時、またも傳令北川大尉馬を飛ばせて來り

「賊の前進頗る急なり、よろしく行程を倍加して入城せよ」といふ命を傳へた。この日は雨雪ともども降り、寒威凛烈、手足も凍えんばかりであつたが、同大隊はヒタ進みに進んで、夜に入つて南關に達し、翌日は早朝出發して、行程六里高瀬に着いた。こゝから熊本まではもはや六里に過ぎないが、進路最高度の強行軍によつて、將卒の疲勞甚だしく、しかも賊徒はすでに近く熊本に肉薄してゐるのであるから、或は到着と同時に戦闘を開始せねばならぬかもしれぬと、山階大尉は英隊をもつて、馬場人力車等を雇ひ入れ、十九日午後四時いよいよ熊本城に入つた。

月下の混戦亂闘 一方乃木副隊長も亦、十七日夜半福岡において同様の訓令に接し、即時同地分屯の第三大隊に出發準備を命ずると、もに、小倉の聯隊には電報をもつて命を傳へ各隊はそれ／＼即時屯營を發して、いづれも最大急行軍をもつて熊本に向つた。しかしこれ等の諸隊は、二十二日早くも熊本附近において賊軍と衝突し、いづれも熊本に入城することを得なかつたのである。

即ち副隊長乃木少佐は、軍旗(旗手は少尉)と、もに二十一日久留米を發して、同夜南關に達し、翌二十一日午前六時第三大隊の右半大隊を率ゐて同地出發、同十一時高瀬に到着、食後若干の酒を與へて元氣を恢復せしめ、壯健なるもの六十餘名を率ゐて、午後一時更に勇を鼓して前進を續行し、木葉原に達した時

「植木はすでに賊軍のために占領せられたり」との情報に接した。往くこと暫くにして、更に第四中隊に邂逅したが、蓋し同中隊は、同日正午、櫻原の行動に策慮するため、小鹿を發して植木に向つたところ、植木がすでに賊の手に歸したことを聞き、間道から田原に出たものである。そこで乃木中隊長は、同中隊を併せ前進し、斥候を放つて植木處を偵察せしめたが、賊の隻影もなかつたので、午後六時植木に進出し、村民が賊のために炊ぐところの糧食を押収して、全隊の飢を充たすと、もに、さきに植木を占領してゐた賊衆の顔る儼然なること、並びに賊軍はまだまだ遠くに去らず、附近に潜伏して居るらしいことを知り、斥候を放つて偵察せしめたところが、俄然向坂の林中から賊は一齊に猛烈なる射撃を開始した。われは直ちに道路の左右に散開して地物に隠り、銃に敵を射して敵の出撃を待ち、午後七時賊の吶喊肉薄するに及んで、一齊に猛烈なる射撃を浴びせた。賊は忽ち多数の死傷者を出して退却したが、わが兵力の寡少なるを知るや、再び右翼を包圍するやうにして逆襲して來た。この時さきに行軍中落伍したもの、内、十餘名追及して來たので、これをも稀薄なる戦線に増加し、將校もみな傷者の銃を執つて射撃し、午後九時まで對戦を繼續したが、つひに賊は突撃奮戦し來たり、われも亦一步をも退かず、かくて月下に壯烈なる白兵戦が展開せられた。しかし榮券の差が大きい上に、敵は刻々に兵力を増加するのに反し、われは死傷相つき、しかも増援隊來着の望み全くなく、つ

ひに全滅に陥るの外はなかつたので、遺憾ながら一時退却と決し、まづ傷者、彈藥等を後退せしめた後、九時四十分戦線を左右に開いて退却し、千本嶽に陣地を占領して敵の追撃に備へたが、敵は敢へて追及し來らず、この時銃聲を聞いて急馳し來れる第三中隊(森大尉)をして、七木村の隘道に據つて退却を掩護せしめ、聯隊長は疲勞せる兵を率ゐて、木葉に至つて合營した。この夜混戦亂闘の間に、聯隊旗手河原林少尉戦死して、わが軍旗が行衛不明になつたことは、すでに第二章に述べた通りである。

四、高潮附近の激戦

吉松大隊長の戦死 さて翌二十三日午前八時、第三大隊(長は吉松少佐)は進んで植木に據れる敵を攻撃し、對戰數時、午後二時ごろ第二大隊長青山大尉は第二、第三中隊を率ゐて聯隊に追及し、即時第一線に増加して戦闘に参加したが、賊勢は昨日に倍加して、山に連なり谷に充ち、猛烈に銃火を集中すると、もに、しばく突撃して來た。特に米道上の吉松隊の苦戦甚だしく、聯隊長に對して援兵を講求した。

しかしこの時すでに聯隊長の手裡には、殆んど半分隊の豫備兵もなく、聯隊長は自ら藤井中隊を指揮して、左方の一高地を占領し、わが左翼を挽回せんとする敵と對戦中であつた。乃木聯隊長は、山を下つて吉松少佐に曰く

「いまや増加すべき兵無し、たとへ有るも兩翼奪る急なり、吾若し堪へ難しとせば、予代つてこの方面の敵に當らん」

と。吉松少佐笑つて曰く

「否、たゞ餘兵あらば請はんと欲したのみ、吉松こゝにある限り、この戦線は一步も退かず、御安心あれ！」

と、兩者の意氣何と壯烈ではないか。乃木聯隊長これを聞き、亦笑つて去る。間もなく本道方面に、熾んなる吶喊の聲が起つたが、これぞ吉松少佐が、僅かに残れる渡邊中尉以下二十餘名を率ゐ、熾然として敵線に銃撃突撃を試み、奮戦格闘してこれを數百米外に驅逐したのであつた。この突撃に吉松少佐は重傷を負ひ(同夜遂に死亡)、渡邊中尉も亦負傷した。

かくて本道方面の賊勢はや、熾んだが、兩翼の戦闘はいよゝ熾んで、特に右翼方面は最も激烈を極めた。その地形が、寡兵をもつて持久するに不利であつた、ゆゑ、日没後一先づ石貝に退却するに決

し、將さに退却を開始しようとする時、賊の一隊は早くも木葉山を迂迴して、階佐の背後に出現し、同時に正面の敵も亦一弾に殺錯して來た。われは一時隊伍を亂したが、直ちに銃剣をとつてこれを避へ、折からの黄昏時、凍雨寒冷、硝煙四塞の間に、白刃相撃ち赤手相搏つ大混戦となり、その混亂名狀すべからず、この時乃木聯隊長は、掩護隊の位置に疾衝して隊伍を整頓すべく、その乗馬がすてに疲れたので、吉松少佐の馬に乗りかへたところが、たまく一彈馬に命中し、馬は狂奔して駆け出し敵中に飛び込んで打ち倒れた。聯隊長は地上に投げ出され、忽ち敵は銃剣を揮つて迫り、聯隊長危く見えた時、大橋伍長は直ちに馳せて身を以てこれを蔽ひ、少尉相澤節夫また白刃を揮つて斬りつけ、ために伍長は頭部に數ヶ所の刀傷をうけ、少尉は身に數弾をうけたが、幸ひにして聯隊長は無事なるを得た。この夜田中中尉(唯)、宇佐川少尉(成)等大いに奮戦して、敵の追撃を阻止し、聯隊はその掩護に依つて、午後九時過ぎ川床に退却して隊伍を整頓した。この日の戦闘における聯隊の損害は、戦死二十二名、負傷四十七名であつた。

高瀬附近の激戦、かくて二月二十四日は一日休養、この日歩兵第一旅團の先頭部隊が到着したのを最初として、二十五日には征討第一・第二旅團の諸兵が陸續として南關に入り、官軍の士氣大いに昂り、ついで聯隊は第二旅團(司令長官)に編入されて、二十六日から二十七日にわたる高瀬附近の激戦

に参加した。この戦團は、わが征討軍の主力と、賊軍の主力との最初の衝突で、賊軍はこの戦團によつて一撃に降旗を決しようとしたもの、如く、その攻撃の猛烈なること前後に比なく、實に西南役中第一の激戦といはれたほどである。

二月二十六日わが聯隊は、旅團の最先頭に在つて前進し、乃木聯隊長は心中決するところあり、自ら馬を捨て、第一線に立つて指揮し

「他隊の援助をうけて勝つたのでは、よし勝つても聯隊の功ではない。聯隊は獨力をもつて敵を破らねばならぬ」と訓諭し、大いに力戦奮闘、數回の突撃の後つひに白石山を奪取し、尙も賊を急追して木葉を占領した。同時に大哨を田原坂上に配置して、その占領を確實にしたのである。しかるに午後三時にいたり、旅團司令官から後退の命をうけた。聯隊長は大いにこれを不可となし

「一たびこの地を棄つれば、他日再び得難し。依つて當聯隊は獨力を以て今夜田原坂を維持し、明朝進撃の先鋒たらんことを期す」

との意見を具申したが、つひに説かれず、再び後退の嚴命に接し、聯隊長以下涙を吞んで同夜石原に退いて舍營した。果せるかな後日、田原坂の激戦起るに及び、彼の日聯隊長の企圖通りに田原坂を占領してゐたならば、この二旬餘にわたる田原坂の苦戦は無かつたであらうと、わが將卒は等しく嘆息

を發したのであつた。

賊軍の逆襲 二十七日賊軍は攻勢を取り、大急してわが全線に逆襲して來たが、その勢ひ頗る猛烈を極め、その戦陣は前日に比して更に激烈であつた。わが軍の負傷算なく、三好旅團長先づ負傷し、乃木聯隊長は自ら精兵二十名を掲げて、海軍官の敵を襲撃する際つひに負傷し、第三大隊第一中隊の如きは、中隊長功大尉負傷して各小隊長亦在らず、一時近衛旅團津田少尉の指揮をうくるに至つたほどである。この戦陣における聯隊の損害は、戦死十四名、負傷四十六名であつた。

戦陣後乃木聯隊長は後送せられて、久留米の野戰病院で治療をうけてゐたが、田原坂の苦戦を聞くや、ひそかに病院を脱走して戦線に還り、再び聯隊の指揮を取つた。め士氣大いに振ひ、「脱走聯隊長」の名は、當時軍中に頗る有名となつたのであつた。

五、第一大隊(左半)の熊本籠城

第一大隊の籠城 これより先さ聯隊の先頭部隊として、二月十四日午前六時、山崎大尉指揮の下に小倉を發した第一大隊の左半大隊(第三中隊長山崎大尉)は、晝夜兼行、急行軍に次ぐに急行軍を以てし

て、十九日午後四時辛うじて熊本城に入つたが、この日城中火を失して、兵舎の大部分と三十日分の糧食とを鳥羽に歸し、更に火は市街に延焼して熾んに燃焼しつゝ、あつた。

しかも賊軍は、二十一日午前七時早くも城下に侵入して、十重二十重に城を包圍し、爾後連日連夜猛烈に攻め立てたが、わが第三中隊は下馬橋を、第四中隊は糞丸および木丸の守備に當り、他の諸隊と協力して極力防戦に努めた。初め城中には籠城の困難なるを察し、寧ろ潔く一戦して降旗を一舉に決すべしとの説もあつたが、當時一般の人心頗る動搖し、萬一最初の一戦において官軍が敗退するやうなこともあつたならば、忽ち九州一圓は動亂の巷々化し、延いて暴徒は全國各地に蜂起せんとする形勢に在つたので、司令官谷少將は斷乎として至難なる籠城策を探り、堅忍持久して援軍の到着を待つに決したのである。

突圍隊の出撃 しかし征討軍の前進は、遅々として進まず、籠城日を重ぬるに従つて彈藥・糧食等は漸やく缺乏し、傷病者はいよゝ増加するが、依然として救援軍は影も見えない。外界との交通は全く杜絶して、何一つ情報は得られないといふ有様で、志氣漸やく沮喪しようとする頃、日夜各方面に激しい銃砲聲が起り、官軍近く咫尺の間に迫るを思はしめたので、よろしく出撃して救援軍に聲援し、併せて賊軍の兵力を牽制することとなり、三月二十六日突圍隊を編成して、午前四時東京町口から

進撃した。その兵力は約四中队および砲二門で、わが九井大尉は第四中队および白砲二門を率ゐる。突撃隊に加はり、近く十米の間に賊と對戦し、大尉以下銃を携へない將校は、瓦石を拾つて擲つなど、惡戰苦闘の後その倉庫を燒き胸壁を破壊して、日没と、もに城内に凱歌を奏して歸つたが、多少の死傷者はあつたけれども、城内の志氣は大いに振ひ起つた。

ついで四月八日奥少佐が、救援軍と連絡のため、突撃隊を率ゐて安巳橋から出撃するや、わが小川(又)大尉は第三中队を指揮してこれに加はり、同日午前四時、突撃隊に先だつて安巳橋から出撃し、哨戒して賊營に突入り、接戦格闘大いに賊軍を破り、更にこれを追撃して新屋敷、迎町方面に壓迫した。やがて水前寺方向に黒煙の揚がるのを見たが、これぞ突撃隊が首尾よく敵線を突破して、その作面に進出した合図である。中隊は思はず萬歳を唱へてその成功を祝し、更に賊を破つて、糧米七百二十包、小銃百挺、彈藥三千餘發を南獲し、午後三時命により、意氣揚々と城内に引揚げた。しかし尙ほ糧秣彈藥の缺乏は日に甚だしく、嚴に節金を勵行し、たまく、斃馬あればその肉を割いて各隊に分ち、以て陣中の珍味としたほどであつた。

六、爾後の諸戦闘

聯隊の轉戦 さて一方征討第三旅團に屬する聯隊主力は、つねに攻勢の先頭に立つて、殆んど連日連夜田原坂二俣口に奮戦し、また山鹿方面に苦戦を重ねたが、四月十五日つひに賊の重圍を破つて、翌十六日熊本城に入り、こゝに始めて聯隊の全員は一所に集合するを得たのである。五月乃木聯隊長は鎮西參謀に轉じ、奥少佐代つて當聯隊長に補せらる。

これより先き四月二十日聯隊は、熊本附近の敵を撃破し、爾後第一・第二大隊は熊本城に、第三大隊は健軍村に宿營して、暫らく守備の任に服してゐたが、五月中旬賊軍後に侵入の報を得るや、第二大隊長山根少佐(成信)は、先づ部下二中隊を率ゐて百貫石より濠路小倉に到り、ついで新聯隊長奥少佐小倉に到着して、その大隊並に他隊と併せ指揮し、ついで賊勢漸やく猖獗を極めたので、第三大隊および第二大隊の殘部亦この方面に増加せられ阿蘇山麓より竹田を経て進軍し専ら翌後日の賊兵掃蕩に従事し、臼作・三田井方面に奮戦して功を樹て、八月末一日熊本に集合(竹田を経て)した後、第一・第二大隊は更に敗兵を追ふて南下し、城山包圍に際しては、奥聯隊長は自ら第二大隊を率ゐて、大明神山から一本松に至る間を守備し、第一大隊は入來・郡山附近に位置して背面警戒の任に當つた。九月二十四日未明の城山總攻撃には、山根第二大隊長は、熊本鎮西選抜の集成二中隊(内一中隊は我第および工兵一小隊を指揮して、池平山口から突入したのであつた。

勲功により軍旗再御授與の恩命を受く、かくて二月以來前後九ヶ月にわたる戦亂も全く平定し、隆盛・利秋以下悉く自反して城山の霧と消え、他は多くわが軍門に降つた。同二十七日征討總督官には鹿兒島に入れ、各團隊長を會して祝宴を舉げ、同日征討軍の編成を解き凱旋を命ぜられた。特にわが職隊は、植木の初戦以來其の勲功拔群なりとて、この日有栖川總督官から、軍旗再御授與の令達(第二章第 三節參照)を受け、將卒ともに感極まつていふところを知らず、聖慮寛宏、皇恩の洪大なるに感泣したのであつた。

七、凱 旋

九月二十七日凱旋を命ぜらる、や、職隊は即日鹿兒島を發して歸還の途に上り、十月五日一先づ川尻に集合の上、翌六日谷少將引率の下に、凱旋行軍を施行して熊本城に入り、同市に滞在すること旬日、同月十七日熊本市を出發して、第三大隊は二十一日福岡分營に、他の諸隊は二十三日小倉屯營に、いづれも無事凱旋を終つた。